



ホーチミン市内を行き交うバイク。渋滞緩和のため、日本などの協力によりインフラ整備が進められている



高層ビルの合間にある巨大マーケットには、昔ながらのベトナムの雰囲気が残る



ベトナム カンボジア
from VIET NAM & CAMBODIA

人がつなぐ知のネットワーク

アジアの人材はアジアの中で育てる。
ASEANのさらなる成長に求められる人づくり。
国の、そして地域の産業を支える人材の学び舎である大学で、
ASEANと日本のネットワークが広がっている。



変わりゆく街、
求められる知

ザー、ザー、ザー。
朝から降り続く雨。「雨期も
もうすぐ終わりだよ」。人々はそ
う言うが、一向に止む様子はない。
その激しい雨の間をすり抜けるか
のように、幾重にもバイクが重な
り、目の前を通り過ぎていく。そ
の流れも、決して途切れること
はない。

10月上旬、ベトナムの商業都市
ホーチミンの街中は、今日も朝
らにぎやかだ。
前回訪れたのは約4年前、その
発展ぶりは明らかだった。現地の

女性が身にまとうアオザイ、屋台
に並ぶフォーや生春巻き、色鮮や
かな雑貨……。そんな、典型的な
ベトナムの姿は今、大きな変化を
遂げている。街中にそびえ立つ高
層ビル、目抜き通りのブランドシ
ョップ、コンクリートで舗装され
た道路。数年後には地下鉄も開通
予定だという。
日本からわずか6時間のところ
にある街。この地に向かう飛行機
は、観光客に負けじと日本のビジ
ネスマンでいっぱい。そう、ベ

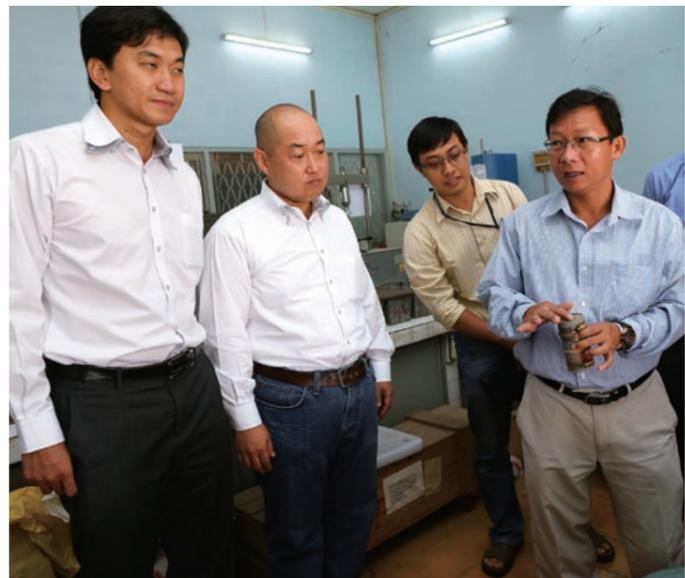
トナムは今、新たな市場を求める
日本企業にとって、熱い「国」な
のだ。

「ベトナムへの進出は、日本
での投資セミナー参加がきっかけ
でした」

そう話すのは、サムシングホー
ルディングス株式会社ホーチミン
駐在員事務所小林亨所長。地盤
調査・地盤改良を行う同社がベ
トナムに進出したのは3年前。「最
初の数年は先行投資という覚悟で
した。日本の技術がそのままベ
トナムで使えるわけではない。コス
トの問題もありますし、我が社の
技術をどう生かせるのか、地元
の大学と連携して調査を進めてい
るところです」。

そのパートナーが、ホーチミン
市工科大学のチャン・グエン・ホ
アン・フン教授率いる研究チーム
だ。テーマは、水田のあぜの土質
改良。この国の農業を支え、メ
コンデルタ地域の洪水対策にも活
用できる可能性を秘める技術だ。海
を超えて、東北大学もチームの一
員として関わっており、「日本の
技術とのマッチングを図る上で心
強い」と小林所長は話す。

洪水から水田を守るため土質改良技術の開発に取り組むチャン教授(右端)と小林所長(左から2人目)。東北大学のサポートで日本の技術力との融合を図る



ASEANの産業人材を 育てるネットワーク

ベトナムと日本の大学、そして、
日本企業。この連携を可能にした
のが、日本とASEANの大学が
10年にわたって築き上げてきた大
学間ネットワークだ。

きっかけは、1997年のアジ
ア通貨危機だった。タイに端を発
した通貨下落の余波はあつという
間に近隣国に広がり、経済停滞と
いう大きな影を落とした。「欧米

ベトナムの商業都市ホーチミンの
市街地。近年の経済成長は著し
く、新たな市場を求めて進出する日
本企業も多い

写真(p10上を除く): 高橋智史(フォトジャーナリスト)

「日本の大学と組んでメリットがある」と思ってもらえるよう、私たちが

部生時代の同期」という馬場教授も、今年からホーチミン市工科大学との共同研究に参画している。

そして、その日野出教授とは、学

激にもなっています」と日野出教授は話す。

国内の理工系大学の中でも先駆けて、産業界との連携、海外の大学との交流に積極的に取り組んできた東京工業大学。「私の研究室でもASEAN地域の留学生が学んでいますが、とにかくみんなエネルギーが豊富です。自分が何のために研究しているのか、何を目標としているのか、目的意識がはっきりしている。日本の学生たちの刺激にもなっています」と日野出教授は話す。



プノンペン市内にあるカンボジア工科大学



プノンペン郊外の飲料メーカーとの打ち合わせに参加するホル講師(右)



「日本とASEANの大学をつなぐネットワークは貴重な財産。問題を共有し、それぞれの大学の強みを生かして解決していきたい」と、カンボジア文化・芸術省のプーン・サコナ大臣

※「アセアン工学系高等教育ネットワーク(ASEAN University Network/Southeast Asia Engineering Education Development Network)」の略称。

最も力を入れているのは、産業界との連携。「研究は研究室の中で終わってはいけない。社会に還元してこそ意味がある。産学連携の経験豊富な日本の大学に学びたい」と教授陣は意気込む。

今、ASEANと日本の大学が最も力を入れているのは、産業界との連携。「研究は研究室の中で終わってはいけない。社会に還元してこそ意味がある。産学連携の経験豊富な日本の大学に学びたい」と教授陣は意気込む。

国内の理工系大学の中でも先駆けて、産業界との連携、海外の大学との交流に積極的に取り組んできた東京工業大学。「私の研究室でもASEAN地域の留学生が学んでいますが、とにかくみんなエネルギーが豊富です。自分が何のために研究しているのか、何を目標としているのか、目的意識がはっきりしている。日本の学生たちの刺激にもなっています」と日野出教授は話す。

アジアで学び、アジアで生かす

隣国のカンボジアも例外ではない。首都プノンペンはホーチミン

から飛行機でわずか50分。あつという間だが、国境を越えると、やはり雰囲気は一変する。ホーチミンに比べるといくらか落ち着いた感じが、それでも交通量はこの数年で格段に増えた。いわゆる伝統的な市場を背に、大規模なショッピングセンターや、おしゃれなレストランも見える。

もちろん、ASEAN域内外の企業の進出も増えている。そしてこの国の産業を支える人材を育てているのがカンボジア工科大学だ。「SEEDNetは、ASEANの人づくりのプラットフォーム。日本で最先端の技術を学んだ学生たちが、見違えるように成長して帰ってくるのは頼もしい」とオム・ロムニー学長。彼自身も93

年から北見工業大学、北海道大学への留学経験があり、外のアジアで学ぶ意義を、身をもって感じている。

SEEDNetの博士号取得プログラムの一環で、静岡大学で学んだホル・シルヘン講師も同様に「最先端の技術だけでなく、協力的な精神、粘り強さなど、研究に対する姿勢に刺激を受けました」と語る。現在、地元の大手飲料メーカーとの工業用水に関する研究を、静岡大学時代の恩師と相談しながら進めている。

大学が人をつくり、そこで生み出された研究成果が社会に還元されていく。ASEANと日本の大学は、そんな未来を共に描き続けている。



「国は違えど、同じ研究者として私たちは“ファミリー”です。アジアの産業を活性化するために共に汗を流したい」とロムニー学長

顔と顔を突き合わせた共同研究

そしてこの日、ホーチミン市工科大学には、東京工業大学の日野出洋文教授(理工学研究科国際開発工学専攻)と馬場俊秀教授(総合理工学研究科化学環境学専攻)が訪れていた。それぞれの共同研究の進捗を確認するためだ。



エビの養殖池の水質管理に取り組むホーチミン市工科大学の研究者たち。フィールドワークは研究の基本だ



教室の外のスペースを使って実験に取り組むベトナムの学生



「学生たちにとって、日本への留学は大きな目標の一つになっています」と話すトゥアン副学長

に頼ってばかりではいけない。アジアが一体となって、産業を育て、競争力を高めなければ」。

そんな思いが高まっていた時、手を挙げたのが日本だった。橋本龍太郎首相(当時)が「アジアの持続的・安定的な経済開発の実現のためには、産業界を活性化させる人材育成が重要」と強調。これを受けて小淵恵三首相(当時)が、「工

学系高等教育の人材育成」を政策として打ち出した。

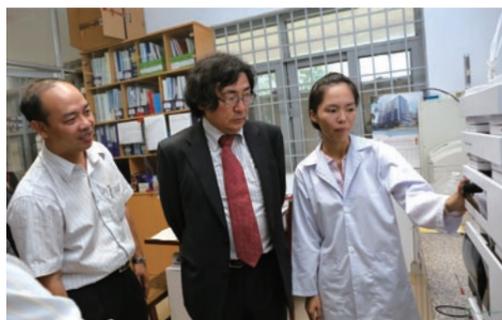
工学系の人づくり。その最前線となるのは、やはり大学だ。そこで、2001年に誕生したのがAUN/SEEDNet※。ASEAN各国の工学系トップ大学26校、日本の大学14校がネットワークをつくり、域内間の修士・博士課程の留学プログラム、共同研究

などを通じて、相互交流を促進していくというものだ。

そして、そのメンバー校の一つがホーチミン市工科大学。市街地のけん轡をくぐり抜け、車を20分ほど走らせたところにキャンパスはある。「10年前までは、国外だけでなく、国内ですら大学間の交流がほとんどなかった。優秀な教員は欧米の大学に行ってしまう、



共同研究のパートナー企業を訪問するフォン・ハ講師(左から2人目)と日野出教授(左端)。「この企業には卒業生も多く、産学連携もうまく進んでいるようですね」



研究室で学生に機材の説明を受ける馬場教授(中央)。「これだけの熱意があれば、きっと研究成果にもつながるはず」